

アラスカと大雪山① クマとの出会い

お昼寝中のグリズリーベア親子（昨年6月、米国・アラスカ州デナリ国立公園で）



10代の頃、アラスカに暮らし、アラスカの自然や野生動物を撮影していた写真家、星野道夫さんの作品に出会いました。ちょうどその頃に登山を始め、一人で山に通う姿を心配した周囲からは「クマに気をつけるんだよ」とよく忠告を受けていました。皆さんが持つクマのイメージはどんなものでしょう？ 怖い？ 肉食？ 襲われそう？ おそらく、マイナスのイメージが多くあるでしょう。私もそうでした。ところが星野さんの作品を見て、これまで持っていたクマのイメージが大きく変わりました。

アラスカの大自然一。母グマが子グマにサケの捕



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然ガイドなどで活躍する人たちをリレーしています。

り方を教えていたり、草原で寝転んでリラックスしていたり…。今まで知らなかったクマの暮らし。なんて気持ち良さそうな表情だろう、なんて愛情深い動物だろう…。美しくも厳しい自然で生きるその姿は神々しく、見れば見るほど（知れば知るほど）、崇高で尊い存在へと変わっていきました。

そして遙か遠くのアラスカではなく、私たちのすぐ近くの大雪山にもクマがいる。とても誇らしい気持ちになり、アイヌの人々が、ヒグマのことを「キムンカムイ（山の神様）」と呼んでいたことにも大変納得しました。

星野さんはクマだけでなく、いろいろな野生動物を撮影していたので、日本では絶滅してしまったオオカミや、年々減少している北極の氷上で生きるホッキョクグマの存在を知りました。新しい世界や視野を広げ、野生動物や環境保全に興味を持ち、今の職に就いたのは星野さんの影響が大きいです。

「いつかアラスカに行って、星野さんの写真集に出てくるような風景や野生動物を見てみたい」一。そして去年の夏、ずっと思い描いていた夢がつかないまま。（星野道夫さんの写真集は大雪山ライブラリーにも置いているので、ぜひ見に行ってみてください）

（続く）

環境省東川自然保護官事務所アクティブレンジャー 渡邊あゆみ



インドネシア語を話さないインドネシア人—多言語社会インドネシア

東川町国際交流員 (CIR) ファティシナイファティマ

皆さんは日常、何語を話していますか？ 日本の公用語は日本語なので、おそらく日本語でしょう。しかしインドネシア人は違います。

インドネシアの公用語はインドネシア語ですが、統計局の調査によると、日常会話に公用語を話す人はたった19.94%です。驚きです

ね！ インドネシア人は一体何語を話しているのでしょうか？ 英語でもオランダ語でもなく、79.45%は地方語を話しています。

インドネシアには300以上の民族が存在するといわれ、民族によって文化や習慣や言葉などが異なっています。教育文化省言語開発育成庁の調査によると、2017年10月までに確認及び検証ができた地方語は652言語あります。しかし自然災害や異民族間の結婚や地方語に対するネガティブ思考によって話せる人が少なくなり、絶滅危機に直面している地方語も少なくありません。

地方語の保護を目的にして、学校で当地域の地方語の授業を設けています。

私の出身地である「チレボン市」では、2つの地方語が使われていますので、学校では2つの地方語を習っていました。

地方語はインドネシア語より構成が難しく、単語数も多く、敬語もあります。異民族の両親の間に生まれた私は家でインドネシア語でしか話していませんでしたので、地方語は私にとって外国語のような存在です。

地方語の継承と保護を推進する努力は、インドネシアのさまざまな自治体でも行われています。例えば、ビーチリゾートとして大人気なバリ島では、2018年10月11日から毎週木曜日にバリ語の使用が義務化されました。

地方語を次世代に継承するためには、インドネシア国民全員の努力が欠かせないことだと改めて認識しました。私もこれから地方語の勉強を続けていきたいと思っています。マトゥールスクスマ Matur Suksuma! (バリ語のありがとうございます)

